

おおさか
KEY
ワード
第13回

— 大阪の象徴 **みをつくし** —

生き続ける存在感



写真：中之島に架かる難波橋 親柱

大阪市の市章が「みをつくし（湊標）」であることは知られている。「みをつくし」とは、川の河口などで、船舶が航行可能な場所と浅瀬との境界を示すための標識で、古代から海路で栄えた水都なにわを象徴すると同時に、「身を尽くし」という意味の掛詞として、「百人一首」の「難波江の蘆のかりねの一夜ゆゑ、みをつくしてや恋ひわたるべき」でも有名だ。

江戸時代でも、「摂津名所図会」（寛政年間）などの大阪ガイドブックに「みをつくし」が描かれているし、「天保山名所図会」（天保6年）では巻末に、「みをつくし」の古木で作ったと称する短冊掛けや文机、菓子盆などのお土産の広告が掲載されている。今回の表紙、幕末の連作錦絵「浪花百景」の南粋亭芳雪による「天保山」の図に描かれた「みをつくし」も印象的だ。

大阪市の市章としての制定は明治27年（1894）。歴史は古い。四本の直線を組み交わせた「みをつくし」のデザインはシンプルだが、造形的にも優れ、今どきの新しい市章とは異なる風格を感じさせる。「みをつくし」という、古代にさかのぼる歴史的な呼び名があること自体、ほとんど他に例を見ないだろう。

大阪には、この「みをつくし」を組み込んだマークが多くあり、交通局の前身である大阪市電気局は「みをつくし」に「電」の字を組み合わせた局章、消防局も楯に「みをつくし」を描いたマークである。大阪市立大学の学章は、商業の神マーキュリーの翼に「みをつくし」と「大学」の二文字を組みあわせる。高槻市の市章も



写真：かつての市電に取り付けられていたプレート 大阪市電気局局章



写真：アタマが丸くなったみをつくし 難波橋 欄干

「みをつくし」と京都市の市章を合成したデザインであるし、かつて阪急電車の社章は「みをつくし」と神戸の市章を合成したもの、京阪電鉄の社章も、京都の市章を意識して円形に6つ「みをつくし」を放射状に並べる。大阪市立美術館の広報誌も「美をつくし」だ。

街なかでも、いたる所に「みをつくし」がある。私がかん心するのが、百年前の明治45年（1912）に竣工した、中之島に架かる難波橋の親柱である。大阪市の自信とプライドの高さを感じさせるほど、力強く石材に「みをつくし」が彫り込まれている。同じ難波橋でも欄干では「みをつくし」の頭を丸くし、明石の干し蛸のような形に愛嬌があって面白い。個人的に「みをつくし」を集めた写真集を企画したいと、かねがね思っているほど、「みをつくし」のデザインのヴァリエーションは多彩で魅力的である。

もうひとつ、今回の東北地方太平洋沖地震では、大阪市消防局も直ちに被災地に出動し、救援物資を運ぶため交通局の市バスも東北へと走った。雪中、被災地を走る「みをつくし」の市章をつけた消防車や市バスの写真を新聞で見て、これらのプロフェッショナルたちが、それぞれ一般では出来ない活動を市民に代わり、「身を尽くし」て奮闘してくれていることに感謝したい。

古代から大阪の象徴である「みをつくし」は、市民の心のよりどころとして、単なるマークにとどまらない存在感をもって、現代も生き続けているのである。